

気性のあらわれだったといえないだろうか。

藤森さんの解説によれば、本家ヨーロッパでもタイルはもともと内装のものだった。それが日本において変わってきたのが帝室博物館が竣工した昭和十年（一九三五）前後。タイルがレンガに代わって外装材としても主張し始めたのだという。それはタイルの生産が工業

化を意識し始めたこととも関係している。建材としてのタイルの国内生産が、軌道にのってきた時期といえる（余談だがタイルをビルの外装材として使うのは、世界広しといえども日本だけだそうだ）。

同時に内装としてのタイル、モザイクタイルもあり。大正から昭和にかけて常滑や笠原（現、多治見）などの焼き物の産地で、建材としてのタイルは盛んにつくられるようになった。モザイクといえは大理石でつくられるものだったが、そこに少しずつタイルが参入するようになっていった。

帝室博物館の休憩室のモザイクタイルが、どこでつくられたものか、残念ながら記録はない。しかし造営工事の概要を見ると、この博物館に関わった焼き物関連の業者として「本館屋根瓦製作供給 泰山陶瓦合資会社」の記述がある。

泰山陶瓦合資会社は、京都の泰山製陶所と瓦専門の製造所が協力する形で設立した会社である。泰



山製陶所は大正六年の創業。創業者の池田泰山は愛知県知多郡阿久比町の出身で、京都で陶磁器の基礎を学び、大阪で研究を重ね、テラコッタの製作の技術は故郷愛知県で学んでいる。常滑の「洋式建築陶器製造者の率先者」だった久田吉之助工場で習得、このうち京都に創業した。「最初は清水焼の日用陶磁器の花瓶、香炉、茶道具、酒器、食器、陶額、置物等を作っていました。周囲の協力と時代の流れとによって洋風建築用装飾美術品へと移行しタイル、テラコッタ、集正モザイク、陶彫品等を製造して行きました。」（池田泰佑「陶芸家が鬼瓦を造形」、『昭和初期の博物館建築』、東海大学出版、二〇〇五年）。

同社が昭和に入ってからタイルを納めた建築は、秩父宮邸、東京帝国大学図書館、東京軍人会館（現、九段会館）、甲子園ホテル（現、武庫川女子大学）など、枚挙にいとまがない。

「洋風建築用美術装飾タイル」を、日本で最初につくったといわれる泰山製陶所は、なかでも「集成モザイク」の技術に優れていたようで、昭和八年（一九三三）には、「モザイク」用陶板と集成「タイル」の両方で実用新案特許を取得している。この時代に同社がつくっていた写真つきのポストカードが残っている。それを見ると、「集成モザイク」に力を入れている姿勢がよくわかる。集成モザイクとは、タイルを割って張り付けて柄をつくる技術で、その表現をしやすいうちに、専用のタイルを焼いていたのである。四角いタイルの裏面に、バイアス状に筋目を入